

## 翻訳

## 『魔女への鉄槌』第1部問1

ハインリヒ・クラーム

訳 愛知県立大学多文化共生研究所客員共同研究員  
野村 仁子

## 1、はじめに

1486年に出版された『魔女への鉄槌』<sup>1</sup>(以下『鉄槌』と略記)は魔女裁判の歴史において重要な役割を果たした。この書物は魔女はキリスト教国ないしキリスト教徒にとって脅威であると初めて体系的に神学論証を行った。そしてその後16世紀以降激しくなる魔女裁判において魔女を火刑に処す論拠として、また裁判の際の教科書として使用された。著者は各地での魔女裁判の失敗故に悪や悪の手先からキリスト教を救わなければならないという宗教的熱意で<sup>2</sup>-ともすればそれは狂信的な熱意に感じられるのだが<sup>3</sup>-執筆に着手した。

この著作はトマス・アクィナスの『神学大全』になぞらえ、3部構成となっている。第1部では魔女がいかに悪であり危険な存在であるのかという魔女論が様々な書物の権威を通して論証され<sup>4</sup>、第2部には実際に魔女が行う魔術<sup>5</sup>(前半)とその対抗策(後半)、第3部<sup>6</sup>には裁判方法が記されている。本論で扱う第1部は「魔術に必要な3要素;魔女・悪魔・神の許可について」と題され、18の設問に分かれている。問1では魔女の存在性が、問2では魔女と

悪魔が協力する方法、問3では悪魔が魔女を使ってどのように子孫を残すのかが論証され、その後も悪魔や魔女の危険性や魔女の罪がどれ程重いのかなどが述べられており、最後の問18は当時あったであろう魔女懐疑派からの質問とそれに対する答えで締め括られている。

ここに訳出した問1は「魔女の存在を主張することは正統信仰の立場であるが、その反対の見解を強固に主張することは異端であるかどうか」という問で始まり、魔女を火刑台へ送るため神学的根拠を述べている部分である。というのも、先述したように当時は魔女ないし魔術の存在に懐疑的な聖職者がまだ多く、魔女を裁こうと現地に赴いても門前払いされることが往々にして起こっていたからである。従って「魔女は実在し害悪を引き起こす」という神学的な証明が著者には急務であった。著者であるハインリヒ・クラームは、先にも触れた通り狂信的なという形容が適切な程魔女の撲滅に熱心な異端審問官であった。彼は魔女裁判にさほど興味を示していなかった教皇インノケンティウス8世に教書を出させ、それを携え各地で魔女裁判を行った。結果

1 テキストとしては、Christopher S.Mackay, *MALLEUS MALEFICARUM, volumeI, The Latin Text and Introduction*, Cambridge, 2006, Christopher S.Mackay, *MALLEUS MALEFICARUM, volumeII, The English Translation*, Cambridge,2006, Wolfgang Behringer, *Heinrich Kramer(Instititoris).Der Hexenhammer. Malleus Maleficaru.*, Munchen, 2000.を使用した。

出版されてから1487年のイースターの頃までこの作品は、'Malleus Maleficarum'ではなく'tractat wider die Zaubernisse'(魔術に対する論文)'tractat wider die zauberein'(魔女に対する論文)'tractat Meister heinrichs'(ハインリヒの論文)と様々な名前と呼ばれていた。教皇教書、弁明書、ケルン大学の認定書が付された完成版が出版されるのは1491である。

2 『鉄槌』がハインリヒ・クラームの単著なのかヤーコブ・シュプレングルとの共著なのかについては今日もまだ議論されている。しかし本論では、クラームの単著であったという見解を採用し論を進めていくこととする。議論の詳細については、Christopher, S.Mackay, *op.,cit.*, Wolfgang.Behringer, *op.,cit.*,を参照。

3 1945年のインスブルックでの裁判終了後この地の司教ゲオルグ・ゴルザーは友人宛の手紙の中にクラームのことを「明らかに思慮分別に欠けている。早く街を出るべきである。」と書いており、また修道士ニコラスに宛てた手紙の中で「年のせいで子供っぽくなっており、彼の推論は証明されないものだ。」と述べている。

4 その多くがトマス・アクィナスの著作である。次いで聖書やアウグスティヌスなどの教父、アルベルトゥス・マグヌスなどのスコラ哲学者、アリストテレスなどのギリシャ哲学者の著作を論拠としている。

5 ヨハン・ニーダーの『蟻塚』(1435年-1437年)に基づいている。

6 アラゴンの異端審問官ニコラス・エイメリコの『異端審問指針』(1376年)に基づいている。

は惨めなものであった。彼が赴いた多くの地で彼は歓迎されず<sup>7</sup> 1例を除いて<sup>8</sup> 全ての裁判に敗北しているか、もしくは裁判の開始すらままならなかった<sup>9</sup>。そのような中、クラーメルは何故これほどまでに魔女や魔術を憂慮したのであろうか。その思想は著者による弁明書 (apologia)<sup>10</sup> の中に見ることができる。弁明書の中でクラーメルは世界の終焉が真近に迫っており、悪魔がその力を強大にするためまた魔女を手先として世の中を混沌へと向かわせているという緊迫した状況を訴え、その危機を脱出するためには悪魔の手先である魔女を殺さなければならないと述べている。

『鉄槌』問1ではクラーメルが魔女や魔術の存在を懐疑派に認めさせようとするあらゆる権威を用いて自身の正当性を主張しているのが見て取れる。

## 2、翻訳

翻訳文中の( )は訳者による補足  
(問1)

魔女<sup>11</sup>が存在するという主張はまさしく普遍的(信仰)<sup>12</sup>であるが、その反対(の主張)を頑なに弁護することは全くもって異端であるかどうか。<sup>13</sup>

これらの主張が普遍的(信仰)ではないことを証明する。

グラティアヌス教令集<sup>14</sup>には「何らかの被造物が良くも悪くも変化させられ得ること、もしくは他の姿や外見に変化させられ得ることが、あらゆるものの創造主以外によって生じさせることができると信じる者は、異教徒や不信心者よりも悪である。」とある。このようなことが魔術師や魔女によって行われたと報告されたなら、そのような(魔女や魔術師によって行われると)主張をすることは普遍的(信仰)ではなく異端的である。

さらに、地上においてはどのような種類の害悪魔

術の作用も存在しない。もし存在するのなら、それは悪魔の活動によって起こる証拠となる。しかし、悪魔が肉体的変化を妨げ、また生じさせることができるという主張は普遍的(信仰)と見なされるべきではない。というのもこの場合悪魔は全世界を破壊できるということになるからである。

さらに、例えば病気にさせたり治療をするというあらゆる肉体的な変化は局部的な運動に帰される。これはアリストテレスから明らかである。第1<sup>15</sup>に、それは天体の動きに属している。しかし、ディオニシウスによれば、悪魔は天体の動きを変化させることはできない。何故なら、これは神のみの権限だからである。従って悪魔は、実際に肉体に変化を引き起こす事はできない。そのため、それらの変化は何らかの隠された原因に帰することが必要不可欠である。<sup>16</sup>

さらに、神の活動は悪魔の活動よりも偉大であるのと同様に、神の力は悪魔の力よりも偉大である。しかし、もし害悪魔術が地上に存在するならば、あらゆる状況において悪魔の活動は神の被造物に向けられる。迷信的で偽りの悪魔の力が、神の活動を上回ると主張する事が許されないのと同様に、人間や家畜の姿に関して神の被造物や活動が悪魔の活動によって歪められ得ると信じる事は許されない。

さらに、物質的な力に従属しているものは肉体に影響を及ぼす力を持たない。祈祷師が悪魔への依頼の際にある種の星位を観察することから明らかであるように、悪魔は天体に従属している。従って、悪魔は何らかの方法で肉体に影響を及ぼす力は持っていない。まして、あらゆる点で悪魔より(力の)劣る魔女にはできないだろう。

またさらに、悪魔は(彼らの)技によってのみ行

7 インノケンティウス8世(1432-1492、在位1484-1492)、『Summis desiderates affectibus』「限りない愛情をもって要請する」(1484)。この教書はクラーメルとシュプレングルに全ドイツの教会管区で魔女裁判を行うことを正式に承認するものであった。

8 コンスタンツ司教区とその近郊ラーヴェンスブルクで48人を火刑にした魔女裁判。しかしその真偽は定かではない。

9 ウォルフガング・ペーリンガー(長谷川直子訳)、『魔女と魔女狩り』、刀水書房、2014年、106-107頁。

10 Mackay, *op.cit.*, pp.2017-208, pp.28-29. Behringer, *op.cit.*, pp.117-119.

11 原文では maleficos (男性・複数・対格) が使われている。従って「魔術師」が本来の意味である。

12 原文では catholicum。ローマ教会を中心とするローマ帝国西側の教会は自身の教義を普遍的(カトリコス: 普遍的・世界的)なものと考え、対してコンスタンティのポリスを中心とする東側の教会(正教会)は正しい教え(オルソドクシア: 正しい教え・正しい賛美)を受け継いだ教会とした。

13 原文では問を立てて書かれているわけではないが、ここでは分かり易くするために問1とする。

14 グラティアヌス教令集: 2,26,5,12。

15 アリストテレス、自然学、8巻7章(天体の動き)。

16 デイオニシウス、ポリカルプへの手紙7-2。

動する。しかし、その技には実際の形はない。それ故、アルベルトゥス・マグヌスは自身の著書<sup>17</sup>の中で「形状を変化させることはできないという事を錬金者たちは知るべきである。」と述べている。それ故、策略でもって動く悪魔は、治癒や病気の実際の特徴を引き起こす事はできない。もし治癒や病気が実際に生じるなら、それは悪魔や魔術師の助けがない何か他の隠された原因がある。

しかし、それに反してグラティアヌス教令集<sup>18</sup>には、「もし、時折神の正統な判断や秘密の許可、また悪魔の手筈のもとで預言者や魔女によって・・・」と述べられている。夫婦の肉体関係<sup>19</sup>の妨害に関して魔術によって引き起こされる妨害については3つのことが必要である。(つまり)魔女と悪魔、そして神の許可である。

また、より強い者がより弱い者に影響を及ぼす事がある。しかし悪魔の力は肉体的な力よりも強い。ヨブ記には「地上において彼と比べられる力はない。彼は恐れを知らぬ者として作られている。」<sup>20</sup>とある。<sup>21</sup>

答え。ここでは3つの異端の誤りが反論されなければならない。そして、その否定から真実が明らかになるだろう。トマス・アクイナスの『命題集』に<sup>22</sup>おいて魔女による妨害を扱っている箇所では(次の3つの異端的傾向が述べられている)。1つ目、(ある人が)世の中に人間の想像の中以外では魔術は存在せず、原因が分からない自然の結果を魔女のせいにしてのだと主張しようとしていること。2つ目は、魔女が存在していることは認めているが、魔術の効果を引き起こすために彼ら(悪魔と魔女)が協力するというのは、単に幻覚や空想の中での出来事であると主張していること。3つ目は、悪魔は実際に魔女に協力するが、魔術の効果というものは(人間の)空想や幻想の産物にすぎないというものであ

る。これらの誤りは次のように説明され反証される。<sup>23</sup>

1つ目は、学者によってカテゴリー上異端者であると説明され、とりわけ『命題集』の中でトマス・アクイナスによって説明されている。彼はそこで<sup>24</sup>、この意見は完全に聖書の権威に反しており、不信心の根源であると述べている。その理由は聖書の権威が聖書の多くの箇所から明らかのように、神によって許可された場合、悪魔の力は肉体的なこと(に対して)、また人間の想像力を超えた力を持つ(と示しているからである)。それ故、人間の想像の中以外で地上に魔術が存在しないと言う者は、人間の頭の中以外では悪魔が存在しないと信じているのと同じなのである。その結果、人間は自分自身がもたらす恐怖を自らの考えで悪魔のせいにしてしている。そして幻覚が人間の前に現れるように、強い幻覚から姿は知覚において姿を現すのだから、従って人は悪魔が見えると信じているのである【これは魔女にも当てはまると我々に主張させてほしい】。しかしながら、真実の信仰はこれを退ける；我々は、天使が天から落ち、そして悪魔が存在するというのを信じる。従って、悪魔は彼らの性質に由来する洞察力から、我々にはできない多くの事ができると我々は認める。そして、悪魔がそれらを行うために促した者を魔女と呼ぶ。以上がトマスの意見である。というのも洗礼を受けた人々の信仰の欠如は異端者と呼ばれるのだから、そのような人々は異端の罪で弾劾されるのだ。

しかし、悪魔とその自然の力に関しては否定しない他の2つの誤りは、魔術の作用や魔女そのものに関して相互に意見が異なっている<sup>25</sup>。2つ目の誤りは魔女は実際に悪魔とともに損害を引き起こすために行動するが、その結果は現実のものではなく、空想の中のものであるとみなしている。しかし、もう1つ(3つ目)の誤りは、反対に、損害において現

17 アルベルトゥス・マグヌス、『鉱物について・』第5巻3.1.9。

18 グラティアヌス教令集：2,33,1,4。

19 この箇所では、夫婦の肉体関係に話が飛躍しているように見えるが、著者クラーメルにとっては悪魔・魔女・魔術についての論述箇所の列挙が目的であり、前後の病気の治癒や悪魔の力といった問題と同等である。

20 ヨブ記、41:24 (実際は、41:25) “この地上に、彼を支配するものはいない。彼はおののきを知らぬものとして造られている。”

ここでは神がヨブにレヴィアタンについて説明している。レヴィアタンは本来神が創った海の怪物であるが、中世以降は悪魔と同一視された。

21 ここまでが、2ページ目の「これらの主張が普遍的でないことを証明する」の「これらの主張」である。しかしこれ以降すべての主張が普遍的でないことを証明しているわけではない。

22 トマス・アクイナス『命題集』4巻問34、ここでは、魔術によって引き起こされる婚姻の障害について扱われている。

23 ここまで『命題集』。

24 トマス・アクイナス『命題集』4巻

25 トマス・アクイナス『命題集』における3つの誤りの2つ目と3つ目。

実の効果は存在するが、魔女は幻覚の中だけで悪魔と協力していると主張している。誤りの根拠はグラティアヌス教令集における教会法の2つの箇所<sup>26</sup>に由来している。そこでは第1に、夜間ディアナやヘロディアスと共に出かけて行くと信じている女性が責められている。人はカノン法をそこで理解する。それらの事はしばしば幻覚や空想の中で起こるので、他のあらゆる効果もまたそうであると誤っている人々は考えている<sup>27</sup>。

第2は次のように言われている。何か生き物を、あらゆる物の創造主である神以外で、良くも悪くもあるいは、他の姿や外見に変化させることができると信じていたり断言したりする者は、不信心であり異教徒よりも悪である。またそこで“…もしくは悪く変化させる…”と言われているので、人々は魔術をかけられたあらゆる効果は現実ではなく、単に空想の産物であると言っているのである。

この誤りは異端の傾向があり、教会法（グラティアヌス教令集）の正確な理解に反しているということは、神法や教会法そして世俗法によって証明される。そしてこれは、一般的にもましてや個別的にもカノン法の言葉の明白な説明によって、また次の間においても詳細に導き出されるだろう<sup>28</sup>。

神法は多くの箇所で、魔女は避けるのみならず殺されるべきであると定めている。もし魔女が、実在せず実際の効果や損害のために悪魔と協力しなかったなら、そのような罰は定められなかっただろう。幻想的な思い込みや誘惑に端を発している魂の罪とは異なって、肉体の死は現世の重い罪なしでは与えられない。これは、悪魔の助けを利用する事は悪であるかどうかという間におけるトマスの意見である<sup>29</sup>。従って、申命記では「あらゆる魔術師や祈祷師は殺されるべきである。」と定めている。またレビ

記では「魔術師や占い師に近づき、彼らと肉体関係を持つ魂に対して、私は私の眼で裁き、彼らを私の民の中から根絶する。」<sup>30</sup>と述べられており、また「男であれ女であれ、神託や予言の精神のある者は死ぬべきである。彼らは投石によって殺されるべきである。」とも述べられている。<sup>31</sup>そして悪魔の不思議な効果を引き起こすそれらの人々は予言者と呼ばれる。

また、そのようなこと（悪魔の不思議な効果を引き起こすこと）は実在する。というのも、オヒョジアスはこの契約のために病気になり死んだからである<sup>32</sup>。またサウルも同様である<sup>33</sup>。

聖書の注釈者たちは聖書において悪魔の力や魔術について何か別の事を言っただろうか。命題集の2巻についての博士たちの書物を読み返されたい。そうすれば、呪術師や魔術師が神の許可でもって悪魔の力によって、幻想によるものではない不思議な効果を引き起こす事ができるという事に反論を見出せないだろう。私（クラーメル）は、『対異教徒大全』や『神学大全』にあるような、トマス・アクイナスがその効果について詳細に扱っている多くの他の箇所については沈黙しよう。また、出エジプト記のファラオの魔術師についての説教集や注釈を読まれたい。また、『神の国』や『キリスト教教理』などのアウグスティヌスの著書を読まれたい。また、同様にあらゆる不条理な事に反論すべき学者の著書を読まれたい。

結局、彼ら（魔女裁判反対派）がカノン法（グラティアヌス教令集）の正確な理解に反していることは教会法によって示されている。また、グレゴリウス教書やグラティアヌス教令集について博士たちは、結ばれた、そして結ばれる結婚を失敗させるためには夫婦間の肉体関係の際に害悪魔術を行う他<sup>34</sup>（に方法

26 グラティアヌス教令集；2,26,5,12。

27 ディアナ：ローマ神話の女神。狩猟と月の女神で女性の守護神。ギリシャ神話ではアルテミスに当たる。

ヘロディアス：ヘロデ王の妻。洗礼者ヨハネを処刑させた。

28 聖書。聖書で神が法律を授けている

29 トマス・アクイナス『命題集』2巻。

30 申命記 18:11 – 12 “呪文を唱える者、口寄せ、霊媒、死者に伺いをたてる者などがいてはならない。これらのことを行う者をすべて、主はいとわれる。これらのいとうべき行いのゆえに、あなたの神、主は彼らをあなたの前から追い払われるであろう。”

31 レビ記 20:27 “男であれ、女であれ、口寄せや霊媒は必ず死刑に処される。彼らを意思で打ち殺せ。彼らの行為は死罪に当たる。”

32 列王記下 1:16 – 17 “王にこう告げた。「主はこう言われる。『あなたはエクロンの神バアル・ゼブブに尋ねようとして使者を遣わしたが、それはイスラエルにその言葉を求めることのできる神はいないということか。それゆえあなたは上った寝台から降りることはない。あなたは必ず死ぬ。』」王はエリアが告げた主の言葉どおりに死んで、ヨラムが彼に代わって王になった。それはユダの王、ヨシャファトの子ヨラムの治世第二年のことである。アハズヤには息子がなかったからである。”

33 歴代誌上 10:13 “サウルは、主に背いた罪のため、主の言葉を守らず、かえって口寄せに伺いを立てたために死んだ。”

34 グレゴリウス教令集；4,14,15。

は) ないと言っている。つまり、彼らはトマス・アクイナスが述べているように、また上述したように、害悪魔術が結婚を媒介とした肉体的な結びつきの前に起こるならば、そしてそれが継続されたなら、結ばれた結婚は妨げられ解消されると言っている。自明のことではあるが、人は思い込みや幻覚的な作用についてだったのならその意見を述べないだろう。セグシオやゴットフリードゥス、そしてペナフォルテの膨大な量のスンマを読みたい。そこには、それらの効果は空想の中であり、実際には起こらないと考えられるかどうかという難しい質問をしたとはどこにも見出せない。その代りに、彼らはこれを当たり前のものとしている。そして、(夫婦間の肉体的関係の) 障害が一時的なものか不変なものか判断できるように、彼らは、障害が3年以上続いたらそれは継続していると説明している。そして、障害は魔女によって空想の中で害を与えられているのではなく、悪魔の力によって悪魔と結んだ契約故に真実であり、そして実際に作用され、あるいは魔女なしで悪魔自身によって生じさせ得ると考えていることに疑いはないのである。それは、教会内ではめったに起こりえないかもしれない。何故ならそこで結婚の秘跡が結ばれるからである。その代りに不信心者の間では起こる。つまり悪魔は、当然の権利をもって不信心者を所有していることを知っているからである。ペトルス・デ・パルデは自身の著書の中で次のような事を述べている。新郎は幻影と結婚したが、それにもかかわらず若い娘と結婚した。何度も形を変えて<sup>35</sup>2人の間に割って入った悪魔のせいで新郎は娘を知ることができなかった。悪魔は、教会において魂の破滅の見込みがあると魔女を使ってそのような事を生じさせようとする。そして悪魔がこれのように、そして何故行おうのかという事については以下で説明し、そこでは適切な行為によって人間に害を与えるための<sup>36</sup>7つの方法について扱っている。また、神学者や教会法学者が投げかけている他の問題から次のような事が判明する。すなわち、どのように障害が取り除かれるか、他の害悪魔術によって障害が取り除かれる事は許可されているかどうか、そして害悪魔術を引き起こした魔女が死んだ時、どうすべきかである。これは第3章の中で言及する。<sup>37</sup>

結局、何故カノン法学者たちは魔女のというよりも、予言者の見えないもしくは周知の罪を区別する

ことによって、そんなに入念に様々な罰を引用するようになったのか。有害な迷信は様々な形を取るものである。例えば、グラティアヌス教令集によれば、もし罪が明らかである場合は、聖餐式を拒否され、隠された罪である場合は、40日の償いを課されるとある<sup>38</sup>。同様に、彼がもし聖職者であったなら、彼は解任され修道院の中に收容されるべきである。グラティアヌス教令集によれば、彼が俗人であったなら、彼は破門されるべきである。同様に、グラティアヌス教令集<sup>39</sup>によれば、それらの人々が悪い噂について説明することや彼らを探し出すことは告訴されるべきではない。<sup>40</sup>

また、同様の事は世俗法によっても示されている。つまり、世俗法では次のように述べられている。「民衆が魔術師と呼ぶあらゆる者や占いの心得があるあらゆる者は死刑になるという事を人は知るべきである。」つまり、この法(世俗法)は次の言葉を利用している。「誰も予言する事を許されていない。さもなければ、首切り刀が彼の死刑を執行する。」そして次のように続く。「魔法でもって非の打ちどころのない者を狙う者もいる、また女性の心を肉体的な欲求に向けるような者もいる。これらの人々は野生の動物の前に投げられる。」また、この法には、カノン法と同じ様に、誰でも告発することは許されているとある。それ故、そこには以下のようにある: 名誉毀損の際と同じ様に、誰でも告発することは許可されている。つまり、彼らは言わば神の尊厳そのものに背いているのである。また、彼らは審問の際、拷問を伴う尋問を受ける。そして、どのような身分の者でも尋問に従い、罪を認めさせられた者や自ら罪を明らかにした者は、拷問台に座らされる。世俗法の中で「彼は鉤爪で体を調べられることによって、彼に相応しい罰を受ける。」と同様のことが述べられている。かつて彼ら(魔女)はそのような2重の罰によって罰せられていたことに気付くだろう: 死によって(つまり、身体を引き裂く鉤爪によって、そして彼らを野生の動物の前になげることによって)である。しかし、今や彼らは女性故に焼かれるのである。

同様に、世俗法は接触を禁じている。それ故次のように付け加えられる: それらの人々が他人の敷居をまたぐ事は許されるべきではない。そうでなければ他人の財産は焼かれるべきである。さらに、誰か

35 パトルス・デ・パルデ:『命題集』4.34.2.3。

36 『鉄槌』第1部問5で扱っている。

37 実際には第2部問2。

38 グラティアヌス教令集:3.2.95。

39 ティアヌス教令集:2.26.5.4-9。

40 グラティアヌス教令集:2.28.3。

が彼らを受け入れ意見を聞くべきではない。彼ら(相談を持ちかけた人々)は島へ行かされ、全ての財産を差し押えられる。ここでは、全ての財産の没収と共に、追放刑が魔女に相談を持ちかけた人々に定められている。もし、説教者がそれらの罰を民衆や地上の支配者に公に知らせたなら、それは魔女に対してのその他の論述によるよりも、より動揺を与えるだろう。

またこの法は、害悪魔術から(人々を守る)者を是認している。それ故、上述したように、人間の活動は嵐や雹によって破壊されないことを生じさせる者(守る者)は罰ではなく、報酬に値する。しかし、それらの事を妨げる事が許可されているように、以下に述べることも許可されている。しかし、これらを否定することそして尊大な方法で法に反論すること、これら全ては異端の誤った行為の不安からどのように逃れられるのか。無知が許されないなら、判断されたい。しかし、どのような方法が無知によって許されるのかは、すぐ下<sup>41</sup>で明らかにされる。

要するに、以下の主張は正統信仰であり全くの真実である。幻覚によってまやかしを見せたり空想の作用を行うことができることを例外としないで、魔女は存在し、悪魔の助けでもって悪魔との結ばれた契約故に、神の許可でもって現実の作用を達成できる。しかし、存在する研究は、害悪魔術の作用に及んでおり、それはその他のものとかかなり区別されているので、それらの人々を魔術師というより預言者や祈祷師と呼ぶことは当面の問題とは関係がない。

さて、特に2つの誤りの根拠をカノン法の言葉に依っているので、聖書の真実から過度に離れている1つ目はさておき、人はカノン法(グラティアヌス教令集)を正しく理解するべきである。まず初めに、手段は空想であるが最初と最後の構成要素は現実である<sup>42</sup>。長過ぎて述べられないが、迷信には主に14の形式がある。何故なら、それらはイシドールの『語源学』やトマス・アクイナスの『神学大全』の中で詳細に引き合いに出されており、またさらに後の異端の深刻さについて扱っている箇所<sup>43</sup>で特に言及しているからである。詳しく言うと、この章の最後の問にある。

それらの女性を捉える属性<sup>44</sup>は、予言者の属性と呼ばれ、彼女たち(予言者)の中では悪魔は話もするし不思議な事も成し遂げる。序列の中でこの属性(予言者)はしばしば1番に挙げられる。しかし、魔女が属する属性は魔女の属性と呼ばれる。そして、

彼らはお互いにかなり様々なので、ある属性に依拠している者を他の(属性の)中に捉える必要はない。カノン法(グラティアヌス教令集)でそれらの女性(予言者)のみが引き合いに出されており、魔女は引き合いに出されていないからと言って、またそれらの女性が空想の中でのみ肉体の移動を生じさせるのと同様に、また魔女も然りであるというように、思い込みの結果を完全に迷信の性質やあらゆる迷信の属性に転化しようとする者は、カノン法を誤って理解している。そしてさらに、彼女たちが空想の中でのみ災害や病気に関する害悪魔術の作用を証明しようとする者は、カノン法を歪めている。

それに加えて、もし誤っている人々(魔女は存在しない、もしくは魔術は幻覚であると思っている人々)が最初と最後の現実、つまり悪魔の働きと病気の本质への実際の効果(損害)を認め、しかし、媒介の手段、つまり魔女が空想の中でのみ(悪魔と)協力していると言うのなら、そして媒介は始まりと終わりのの性質を凌駕するように加担するのだが、彼らは咎められなければならないだろう。また、もし幻覚は本当であると言われるなら、それは妥当性がない。何故ならつまり、悪魔との同意した契約によって以外では、幻覚そのものは達成されえないし、また悪魔の活動に参加することもできないからである。この契約において、魔女は完全に身を任せ、空想や思い込みの中だけではなく、実際に悪魔と重大な契約を結ぶ。そして、彼女たち(魔女)は(悪魔と一緒に)現実的にそして肉体的に害悪魔術と一緒に成し遂げる必要がある。従って、次の間で明らかにされるように、あらゆる魔術の働きは、つまり接触によって、視線によって、言葉によってそして家の入口の下に何らかの魔術の道具を置くことによって、はそのため(悪魔と魔女と一緒に害悪魔術を成し遂げるため)にある。

それに加えて、カノン法の言葉を入念に読んだならば、説教者や聖職者が民衆に強調して説教すべき4つの事に気付くだろう。1つ目は、神以外で何か他に高貴で神のごとく存在する者がいるということ。2つ目は、ディアナやヘロディアスと共に出掛けるという事は、悪魔と共に出かけるということである。悪魔は自らをそのように(ディアナやヘロディアス)に見せかけそう呼ぶのである。3つ目は、それらの遠出は空想の中で起こっているということに関してであり、悪魔の精神支配は信仰の欠如によって人間を服従させる

41 後述の無知を述べている箇所。

42 ラテン語のシャレである。

43 おそらく第1部問16。

44 グラティアヌス教令集で言及されている女性。

のだから、精神的に起こっているあらゆる事は肉体的にも起こっていること。4つ目は、彼女たちは何事においてもそのような主人（悪魔）に服従しなければならないこと。従って、これらの言葉を害悪魔術的な行為に拡大することは馬鹿げている。何故なら、行為によって様々な方法があるからである。

しかし、魔女が様々な迷信において、もしくは予言者のように幻想の中において、場所の移動を行うのかどうかについては2章<sup>45</sup>で扱う。【第1部問3でどちらも真実であると述べている。】3章で扱う。

このように、2つ目の誤りは、上記のことを根拠としてまたカノン法の正確な理解故に、1つ目の誤りと共に除外される。このことはカノン法の根拠と正確な理解に関わっている。加えて、カノン法の言葉を根拠として害悪魔術の作用は幻覚の中の作用であると主張する3つ目の誤りは、カノン法の言葉によって除外される。つまりカノン法において「あらゆる物の創造主以外で、何か生き物を良い状態や悪い状態に、あるいは他の姿や（他の外見に）似せた（姿）に変化させることができると信じている者は異教徒よりも悪である」と述べられており、そしてもしそれらの言葉がそのまま捉えられたなら、3つの点<sup>46</sup>において、聖書による証明や博士たちの決定に反している。

従って、例えばカノン法(グラティアヌス教令集)<sup>47</sup>では、いくつかの生物が、つまり不完全な動物が、魔女によって何らかの生き物が作られることが引き合いに出されている。アウグスティヌスが『神の国』の中で、杖を蛇に変えたファラオの魔術師について説明していることに関しては、出エジプト記の注釈の中の「ファラオは賢者を呼んだ。」という箇所を読まれない。またシュトラボの注釈も読まれない。魔術師が叫び声によって彼らが何<sup>48</sup>かの行為を望むことによって、悪魔は世界中を歩き回り、様々な種を集める。そして、その使用から様々な姿が生じうる。また、アルベルトゥス・マグナスと聖トマスの『神学大全』を読まれない。彼らの証言は、簡潔にするために省略する。しかし、想像（の中のこと）が（現実に）起こるということは理解すべきであり、割愛

せずに残しておく。

「良い状態や悪い状態に変化させる」という2つ目のことは、<sup>49</sup>「神の権威によってのみ」叱責として、'罰として'理解すべきである。しかし、これはしばしば悪魔の従属によって行われる。そして、1つ目のことは「主は苦しめ治療する。」また「私は、生や死を作り出す者である。」<sup>50</sup>という言葉に関連しており、2つ目のことは、上述したように「悪い天使の派遣」と関連している。前述したグラティアヌス教令集の中にアウグスティヌスの言葉を調べられたい。そこでは、魔術師と同様に彼らの活動は時折病気だけではなく、死をももたらすとされている。

3つ目のことを正確に理解することは有益である。何故なら、今日の魔女は、かなりしばしば悪魔の働きによって狼や他の動物に姿を変えるからである。しかし、カノン法は、実際の変化や本質に関する変化については話題にしているが、しばしば起こる偽りの変化については話題にしていない。これについては、アウグスティヌスが『神の国』の中で<sup>51</sup>言及している。例えば、極度に評判の良くないキケロやディオメデスの乗り物やプラエスタンティウスの父親に関してである。このテーマは第2部<sup>52</sup>で述べよう。そして、魔術師は常に居合わせるのか居合わせないのか、また悪魔はこの形で現れるのか人間自身の姿なのかについては問6と問7（『鉄槌』第1部）を調べられたい。

しかし、問題の2つ目の部分は、その反対を強固に主張することは異端であると言っているのだから、このような人々を異端の腐敗に陥っているとすべきなのか、または、ただ異端として激しく疑うのみにすべきなのかが問われる。それは明らかに前者である。グレゴリウス4世やルキウス3世の教令集におけるベルナルドゥスの注釈は次の通りである。「我々は、存在する規則によって異端で捕らえられる者は誰でも…確定する。」彼は誰かが明らかに異端の腐敗に陥っていると判断される3つの方法を説明している。例えば、彼が明らかにその行為の明白さによって、また証言や告白による正統な証拠

45 『鉄槌』第2部問1。

46 教会法によれば、あるものの姿を①悪くすること②良くすること③変貌させることの3つである。

47 グラティアヌス教令集：2,26,5,14。

48 アウグスティヌス、『神の国』、10,8。

49 1つ目はという記述が原文中ではなく突然2つ目となるが、注46の①のことであり、このすぐ上に魔女が生き物を変化させることができるという箇所が1つ目である。

50 申命記、32:39”しかし見よ、わたしこそ、わたしこそそれである。わたしのほかに神はない。わたしは殺し、また生かす。わたしは傷つけ、またいやす。わが手を逃れうる者は、一人もない。”

51 アウグスティヌス、『神の国』18,18。

52 『鉄槌』第2部問1。

によって異端に説教した場合である。もしそれらの人々が、魔女は存在せず彼女たちが人間に害を及ぼすことは決してないという主張を公に説教し、軽率にも前述のあらゆる法に逆らうのなら、この規則によって、それらの忌まわしさのもとで明白に捕まえられる者に当てはまる。同様の文面はベルナルドゥスの注釈にもある。読者はカノン法を調べられたい。そうすれば、真実が分かるだろう。

しかしそれに反して、誰かがこれらは非常に厳しく見ると反論として挙げるかもしれない。つまり、グレゴリウス9世の教書に記録されている付け加えられた処罰規定故である。その教書には、聖職者には聖職剥奪を課しており、俗人には世俗の権力の判断で相応な厳しさでもって処罰を委ねるべきであると書かれており、それは無知な人間のため、またそれらの誤り（異端の誤り）は咎められるべきであると理解している多くの人々のためである。そして、グラティアヌス教令集によれば、集団故に司法の厳しさは相応に制限されなければならない。

答え<sup>53</sup>:グレゴリウス9世の教書が、そして我々は、あらゆる人が深刻な疑い故に重罪を犯したと判決を下されることを望まないが、深刻な疑いのある者に対して告訴することができることを命令する、と言っているように説教者は異端の悪徳に関して罪を咎めるというよりは、むしろ弁護することについての我々の意見である。そして我々は、あらゆる人が深刻な疑い故に重罪を犯したと話されることを望まない。人は深刻な疑いのある者に対して告訴することができる。しかし、注解で説明されているように、明白な疑いが存在しない限り、有罪の判決を下されるべきではない。しかし、我々は疑いを排除しえず、このことは嫌悪すべき主張故に信仰の真実に反している。それについては3つの迷信の種類（軽い・重い・猛烈）がある。これらについては、様々な書が述べているし。カノン法<sup>54</sup>でも言及されている。説教者が提示するにはどのような種類があるか尋ねる必要がある。確かに、このような教義を説教する人は、さまざまな方法で誤りを犯すと知られている。彼らは無知によって逃げるができると考えているので、このような無知の結果として誤りを犯す人々の罪がどれほど深刻であるかを気づかせるべきであ

る。無知には多くの種類があるが、魂の治癒の場合どんな種類の無知も乗り越えられない無知（または哲学者の流儀に倣って特定の無知）と呼ぶことはできない。それは法学者や神学者によって事実の無知と呼ばれている。むしろ、彼らの中(法学者や神学者)では普遍的な無知、つまり神の法の無知と考えられている。というのも、神の法によって知る義務がある事柄に関する無知だからである。教皇ニコラウスは「私たちは、天の種を明示することを命ずる。種をまかないと悲惨です！私たちが黙っていると悲惨です！」と述べた。聖書についての知識を持っている必要がある。レイムンドゥス<sup>55</sup>、ホステンシス<sup>56</sup>、トマス・アクイナス<sup>57</sup>によれば、持つことを要求されるものは、傑出した知識ではなく、関連する知識、つまり役割を実行するのに十分な知識である。

しかし、彼らに対する慰めとして、後の利益で先の損傷を補償する限り、この法の無知は、一方で意図的、愚か、怠惰と呼ばれるが、2つの方法で意図的（つまり、自由意志）と呼ばれることを（無知な人は）知るべきである。時折、意図的な知識によって、時には意図的な無知によって。前者は誰にも言い訳を与えないが、非難する。詩編<sup>58</sup>によれば、「彼はどのように動くのか理解したくなかった。」とある。意図的な無知は、何かを知る義務があるが、彼が義務付けられていることを知らない時に起こるのだから、罪を減らすのである。パウロは「私は信仰が欠如していた時無知に行動したので慈悲を受けました。」<sup>59</sup>と述べている。義務付けられているものを学ぶことを怠り、一生懸命勉強したくないために間接的に「意図的」と呼ばれる。これは全体ではなく部分的な言い訳である。アンプロシウスがローマ信徒への手紙で「または、あなたは神の善が悔い改めに対し運ばれるのに気づいていないのですか？」と述べているので、あなたももっとも重大な罪、それは「無知」である。特に現時点では、魂が直面する危険に手を差し伸べるためにすべての無知を払拭しよう、そして、私たちに託された才能のため厳しい判断するを持とう。これにより、私たちの場合、この無知は愚かで怠惰なものとして、物事を正しく見ない愚かで怠惰な類似性によって記述されているのではない。聖書には聖霊がそのような人に彼の力を

53 おそらく罪に対する罰の答え。しかしここから、「無知」についての論述が続く。

54 グラティアヌス教令集：1、34、1。

55 引用箇所不明。

56 引用箇所不明。

57 トマス・アクイナス『神学大全』、4,24,1,3。

58 詩編：35:4。

59 テモテへの手紙1、1:13、"以前、わたしは神を冒瀆する者、迫害する者、暴力を振るう者でした。しかし、信じていない時知らずに行ったことなので、憐れみを受けました"

超える救いの必要性について。直接教える準備ができていと述べている。

最初の論拠に関する答は、カノン法の正確な理解故に明白である。<sup>60</sup>

2つ目に関しては、ペトルス(インノケンティウス5世)が次のように言っている。「もし神によって許可されているのなら、悪魔は大きな妬みの結果として、それでもって人間と戦い、まさにあらゆるものを滅ぼすだろう。」神が悪魔に許可し、またしないことは、悪魔自身に大きな不名誉と不快を与える。何故なら神は悪魔を神の意志に反する行動のために、また神の栄誉を明らかにするために利用するからである。

3つ目に関しては次のように言える。悪魔が魔女を用いて傷付けることのできる構成要素を拾い集め、また痛みや災害その他の行為の原因を作るために、魔女に受動的な構成要素を付け加える限りにおいて、病気やその他の害悪魔術の結果は常に何らかの局所的な刺激に先行する。そして物事の局所的な運動が悪魔を介して天体の動きに由来しているのかどうかと質問されたならば、否でもって答えなければならない。というのも、物事は自然の力によって動かされるのではなく、自然の服従によって動かされるからである。それによって物事は肉体的な物事に関して、悪魔の性質によって所有することができる悪魔の力に従属している。私は悪魔が本質的なものであれ偶発的なものであれ、他の自然の事柄なしで物質的な物に何か形を与えることができるということは可能ではないと言おう。しかし、悪魔は神の許可でもって、物事を局所的に動かし物事を融合させて、痛みや何らかの性質を引き起こすことができる。それ故、害悪魔術の実行は天体の動きの支配下にはないし、悪魔に物や手段が従属していたとしても無理である。

4つ目に関しては、今日の魔術の効果について我々が話している範囲であるが、次のように言える。今日我々が述べているように、神の働きは悪魔の活動によって不完全に変えさせられ得る。しかしこの事は神の許可があつてのみ可能である。それ故、悪魔が神よりも強いということは決してないのである。彼(悪魔)は神の活動を破壊できることになってしまうので、悪魔は神の活動を力によって害さない。

5つ目に関しては次のように言える。天体は悪魔に影響を及ぼす力を持っていないということは全く周知のことである。悪魔は天体の力を凌駕することは決してできないのである。そうではなく、悪魔は

ある一定の星位のもとで魔術師の呼びかけによって来るのである。悪魔はこれを2つの理由から行っているように見える。1つ目；悪魔は、星位の力は魔術師が望む効果に関与させることを知っているからである。2つ目；悪魔は人間を誘惑するために、つまり星の中に何か神の様なものを崇拜させるために行う。この崇拜は偶像崇拜に由来している。

最後は、錬金術についての論述の異議に関してであり、トマス・アクイナスの『命題集』<sup>61</sup>における議論の答からである。トマスは『命題集』の中で、悪魔の活動における悪魔の力について説明している。また、ある種の本質的な形は、自然の原動力によって(例えば、火の性質が木の中に映される)、技によって引き起こされうる。しかしこれは一般的には起こりえない。何故なら技は能動的な性質と受動的な性質が必ずしも一致しないからである。しかしながら、技は何か似たようなことができる。そして錬金術師は何か金に似た物を作る。それは外見上金の性質であるが、しかし錬金術師は本当の金を作ることはない。というのも、金の実質的な形は、錬金術師が用いる火の熱さによってではなく、鉦物が作用するあらゆる場所における太陽の熱さによって生じるからである。従ってそのような金は本質に相応しい働きをしない。そしてまたそのことは他の作用(の場合)も然りである。

主たることに関して、悪魔は魔術によって引き起こされた効果に関連した技によって動く。従って、悪魔は他の要因の助けなしで本質的もしくは非本質的な形を作り出すことはできない。そして我々は、害悪魔術は他の要因の助けなしで起こりうるとは言えないし、それ故悪魔はその助けのもと病気や他の苦しみの本来的な性質を生じさせることができるとは言えない。

しかし、この助けや仲介にはどのような種類があるのか、もしくはしないのかについては後で説明しよう。

60 第1部問1の最初で著者が投げかけた問(さらに、さらにで続けられている箇所)に対する答えがここから始まる。

61 トマス・アクイナス：『命題集』、2.7.3.1。